

【報告】

大阪市立自然史博物館における市民参加の歴史的検討 (1) —大阪市立自然科学博物館時代—

The History of Citizens' Participation at Osaka Museum of Natural History (1)

瀧 端 真理子*
Mariko TAKIBATA

Abstract

Tsutsui Yoshitaka, the first director of the Osaka Museum of Natural History, started a museum supporters' group in 1955. It consisted of such intellectuals as scientists, teachers, and amateurs (so-called "merchant scholars"). They joined the expeditions, helped museum extension, and published "Nature Study", a monthly journal for citizens. They helped Tsutsui to acquire half of an old schoolhouse for the museum.

After the museum moved to Utsubo, five museum professionals were employed. The name of the supporters' group was changed to "Osaka Society for the Study of Natural History". As museum professionals led the educational activities, the supporters' group became inactive. However, more and more citizens participated in the educational activities as their children also joined the nature observation and collecting tours. And furthermore, as Isamu Hiura, one of museum professionals, eagerly led citizens' study circles, more and more new museum fans visited the museum.

During the Utsubo period (1958-1973), the museum professionals came to the conclusion that "Museum Friends" in Japan should be a users' group. In this period, 90 per cent of its members were men, and about half of its members were young people. Some female members were volunteer assistants.

As Toshiro Itou points out, we have good reason to think highly of the joint researches at Osaka Museum of Natural History, because citizens played important roles in it. But during the Utsubo period, the roles of the citizens in the museum were limited (that is, doing joint researches, collecting specimens and the supply of human resources). The history I write here helps us consider to what extent citizens can participate in the museum activities.

1. はじめに

本稿の目的は、大阪市立自然史博物館の沿革を事例として、博物館における市民参加の問題を歴史的に検討することである。「博物館における市民参加」は、近年、理想的に語られ期待されることが多いが、

歴史的事実を具体的に記述した研究は日本ではこれまでほとんど行われてこなかった。「博物館における市民参加」に関する先行研究としては、故伊藤寿朗の「第三世代の博物館」論にまつわる諸論考を上げることが出来るが、伊藤の「第三世代の博物館」

* 追手門学院大学人間学部

平成14年2月1日受理

論は詳細な現地調査に基づいているとは言い難く、伊藤が理想的な事例として取り上げた個々の活動事例については、詳しく再検討される必要があろう。日本で、博物館における市民参加論を最も早い時期に展開したのは竹内順一の「第三世代の博物館」であり、竹内は自立度が高く積極性を持つ市民像を想定しており、そのヒントになったのは、アメリカでの「館の友の会組織」のコレクション購入活動であった¹。その後伊藤寿朗は、この竹内の論をヒントに自身の見解もまじえて「第三世代の博物館」論を展開していった。伊藤は、「第三世代化がめざしているのは、市民の主体的な“参加・体験”による、自己学習能力の育成であり、市民と博物館が共同して新しい価値を発見し、またつくりだしていくところに、その本質がある」とし、館側の対応としては、「一方的な機会提供では不十分である。第三世代の「参加」という、継続的で主体的な参画の「場」と、次の学習段階へと進む「階段」を用意する」必要性を述べている²。ここに述べられた「市民の主体的な“参加・体験”あるいは「継続的で主体的な参画」とは具体的にどのような活動を指すのであろうか。伊藤は、「戦後の博物館を、この世代論でみれば、第一世代はもとより、第二世代、さらに第三世代の課題を先取りしたような館（大阪市立自然史博物館＝旧大阪市立自然科学博物館、横須賀博物館などでは1960年代より、市民とともに地域課題に取り組んできた）まで混在している³」と書いている。

そこで以下本稿では、伊藤が一貫してモデルケースとして取り上げた大阪市立自然史博物館の活動について、その52年の沿革の中から特に「友の会」に焦点を当て、市民参加の実態を、具体的に検討したい。ただし、今回は紙幅の関係から、1949年の開設準備委員会設置から、1974年、長居公園での新館オープンまでの大阪市立自然科学博物館時代を扱う。

2. 大阪市立自然科学博物館の創設と「博物館後援会」

大阪市立自然史博物館の前身である大阪市立自然科学博物館は、1949年11月8日、開設準備委員会が設置され、1950年4月1日には、自然科学博物館費として予算が計上された。同年11月10日、大阪市立天王寺美術館2階廊下一部に数台の展示ケース

を置いて、展示が開始された。1952年4月17日、博物館相当施設に指定され、6月2日大阪市立自然科学博物館条例及び規則制定、7月10日博物館法第10条により登録された⁴。

大阪市立自然科学博物館は、筒井嘉隆館長のもと、数多くの研究者と「町人学者」と称された在阪のアマチュアたちによって作り出されていったものである。天王寺動物園、SCAP、CIE図書館勤務を経た筒井は、教育委員会庶務部長に博物館をつくりたいと相談し、自然科学博物館開設の準備を始めた。筒井は、学者や小中学校の先生に何回か集まってもらって意見を聞き、博物館のあり方を検討した⁵。1949年秋、博物館開設の話が新聞に掲載され、その新聞を見た赤塚久兵衛が筒井のもとを訪れ、協力を申し出た。1950年の春、筒井の東京出張中に役所の筒井の机は市立天王寺美術館の2階に移されていて、博物館の7年間の天王寺美術館での間借り生活が始まった。専任職員としては筒井と1名の事務職員が配置されただけで、1951年4月、堀勝が中学校長より博物館の常勤嘱託に転じた⁶。筒井は赤塚らと市内の学校をまわって標本整理に取り組むかわら、学校標本の修理を行った⁷。当時桃山学院で生物を担当していた辻本修は、筒井らの訪問活動をきっかけに館に関係するようになった。筒井と堀とは、筒井が天王寺動物園に在職していた時代からの付き合いであり、堀の東中学校長時代に校長室で、二人で博物館をつくろうと相談していたのだった⁸。

1940年頃から、筒井は天王寺動物園で標本同定会を行っており、天王寺動物園時代に同定者として協力していた堀・八木沼健夫らが、博物館の有力な協力者となった。博物館の資料収集を兼ねたエクスペディションを、堀、赤塚、辻本、真鍋鶴松、佐藤納、八木沼、林匡夫、伊賀正汎、河野洋、大倉正文、児玉務らの「常連グループ」が協力して、近畿各地で行った。林、河野、大倉、伊賀は、筒井が天王寺動物園時代に開催した中学生採集座談会の出席者であった⁹。

1951年には北山峡調査が行われたが、この調査は当初、植物関係の児玉、瀬戸剛の二名が楽しそうに話していたのを、横で聞いていた筒井が興味を持ち、博物館でやろうと考えついたものである¹⁰。北山峡の調査は春と夏の2回で調査費がなくなってしまう

い、筒井は産経新聞社の博覧会事務局から採集品の出品と引き換えに、秋の調査の費用を出してもらった。岡田康稔は、北山峡調査の新聞記事を見て博物館を訪ね、北山峡調査には、これまでの常連グループのほか、三木茂をはじめとする研究者たちも参加した。また、後に自然科学博物館学芸員として採用された瀬戸（当時府大の学生）と柴田保彦（当時高校生）も参加していた¹¹。

大阪市立大学の三木茂や池辺展生は、1952年の忘年会の席上でトカラ調査を提案した。その後伊賀がトカラを報じた週刊朝日を持参して、皆で行ってみたい、と言い出し、次第に話が具体化した。筒井は教育委員会に交渉に行ったが、予算にない事業は駄目だと叱られ、かわりに朝日新聞社から10万円の調査費の後援を得た。アメリカから返還された翌年で、当時日本の最南端であったトカラ列島の調査（1953年）は、博物館の存在を広く市民に知らせる結果となった。北山峡調査に参加したメンバーは筒井によって「北山峡グループ」と呼ばれ、館との緊密な関係を続け、1955年5月の大阪市立自然科学博物館後援会（現在の「友の会」の前身）を結成する中心メンバーとなった¹²。小豆島、友ヶ島、紀淡海峡、比良山など、国内の調査を兼ねた博物館標本の収集活動に、筒井は在阪のアマチュアたちを積極的に起用していった¹³。

筒井が多くの専門家やアマチュアを集めることが出来た理由の一端は、朝日稔の以下の回想にうかがうことが出来る。「社会教育機関である博物館やその一種である動物園は、勉強する側が能動的に利用する場である。その期待に応じるためには、それ相應の施設・資料と指導に当る学芸員がいなければならないと教えられた。筒井先生のライフワークはこの仕事であったのであろう。先生の熱意には知らず知らず私も引きずり込まれ、そして学芸員の資格をとった。動物園などから原稿を頼まれると（原稿料もくれないのに）、引き受けてしまう身になったのである¹⁴」と書かれているのである。こうした筒井の熱意と社会関係資本（人脈）が、彼の周りにプロ・アマを問わず、多くの後援者を集めていったのである。1955年4月から1957年3月までは、コケの分類に打ち込んでいる児玉が、公立学校に在籍したまま、博物館研究員（1956年学芸員資格取得）と

して出向していた¹⁵。

筒井は館の建物を獲得するために、活発な調査・標本収集活動や教育普及活動を展開する一方で、1955年5月、大阪市立自然科学博物館後援会を組織する。発起人代表には元大阪大学総長で理学博士の真島敏行が依頼された¹⁶。後援会の会誌でもあり、「月刊指導誌」という位置づけでもある『Nature Study』は、筒井が当時博物館の嘱託であった赤塚、伊賀、岡田、河野、阪口、佐藤、辻本、八木沼、と博物館の堀、児玉と協議して、1955年5月から発刊することになった¹⁷。当時関西食糧新聞社の編集長で、戦時中に日本野鳥の会の雑誌『野鳥』の編集を手伝っていた岡田康稔が、初年度の編集を担当した¹⁸。編集委員が後援会のメンバーの中から選ばれ、毎月編集会議を開いて方針を決め、創刊号から12月の第8号までを岡田が編集し、編集担当者は翌年からは筒井館長に引き継がれた¹⁹。会員には名誉会員、賛助会員、A会員（年額千円を納める団体又は個人）、B会員（年額千円を納める個人）の4種類があった。『Nature Study』誌上に会員名簿の記載のある1955年6月から1958年1月までの総合計は、名誉会員16名、賛助会員15名、A会員280名（内訳は学校会員183校、その他団体会員51団体、個人会員46名）、B会員276名であった。

『Nature Study』は館の資金不足を補うべく、館行事の広報のための媒体ともなった²⁰。創刊当時の『Nature Study』の記事に対して寄せられた一会員（浜谷巖）の「私も会員の原稿は集めておられるのですか。いつも同じ人々の記事のみですが、この点をお伺い致します」という疑問に対して、筒井は「本誌は博物館に於て編集し、後援会で発行しています。従って内容も博物館の館報と後援会の会報を兼ねたものになっていますが、趣旨は“Nature Studyの指針”ということであります。それで実際の編集は、毎月1回博物館関係者（館員と嘱託）と後援会の評議員とで編集会議を開きまして、翌月号の内容を相談し、取り上げたテーマによって執筆者をきめ、専門家に依頼したり、各自が分担したりしているのです。皆それぞれ専門家ですから、内容には権威のあることを確信しております。・・・会員の投稿は歓迎いたします。ただし本誌発刊の趣旨と頁数等とを勘案し、採否ならびに文章の改変は編集

表1 博物館行事指導者名一覧

西暦年	野外行事開催日	行事名	指導者	参加人数	N. S. 掲載号
1955	5月8日	多奈川海岸生物研究会	筒井館長・佐藤納・辻本修・内井道夫・瀬戸剛	350名	1-2
	5月14日・15日	岩湧山探鳥会	記入なし	120名	1-2
	5月22日	友ガ島見学会	筒井・児玉・堀氏の指導	記入なし	1-2
	6月11日・12日	比叡山探鳥会	岡田康稔・平松道夫・広原広蔵の3氏	記入なし	1-3&4
	7月28日・29日	博物館主催・大峰山麓自然研究会(洞川1泊)	赤塚久兵衛・上野俊一両氏と筒井館長・堀学芸員	記入なし	1-5
	8月3日・4日	博物館主催・比良山自然研究会(山の家1泊)	案内及び指導"みねはな会"の奥田隼氏	35名	1-5
	8月15日～17日	博物館主催・小豆島自然研究会	赤塚・林・児玉・筒井	46名	1-5
	8月25日・26日	比叡山昆虫採集会	佐藤・林・筒井氏	32名	1-5
	9月24日	秋の虫をきく会(奈良公園若草山) 関西自然科学研究会と共催	三重大学大町文衛教授	120名余	1-6
	9月25日	博物館後援比叡山もたて山植物採集会	児玉研究員	記入なし	1-6
	10月9日	岩湧山ハイキング	岡田・児玉・佐藤・辻本・筒井・瀬戸・飯田の7氏同行	約150名	1-7
	10月16日	高野山ハイキング	赤塚・岡田・児玉・辻本・筒井・林・瀬戸・飯田氏ら同行	20人	1-7
	10月30日	友ガ島ハイキング	赤塚・岡田・佐藤・瀬戸・筒井・中島・林・堀氏同行	120名	1-7
	11月6日	牛滝山の"もみじを探る"ハイキング	岡田・児玉・佐藤・瀬戸・筒井・中島・堀・八木沼・飯田・西松氏ら同行	200名	1-8
1956	2月5日	宇治田原化石採集会	市大藤田和夫・学芸大赤塚久兵衛両氏指導	約200名	2-3
	2月26日	サルの生態研究会(箕面)	市大川村俊蔵氏指導	30名	2-3
	4月29日	磯遊びと海岸生物採集会(南淡輪海岸)	筒井・佐藤・伊賀・内井の4氏	約300名	2-5
	5月12日	岩湧山の野鳥をきく会	筒井・岡田・藤原の3氏	50名	2-6
	5月26日・27日	比良山の自然をさぐる会	記入なし	市会議員の上田武氏ら20名	2-6
	7月21日～23日	稲村ガ岳・洞川自然研究会 関西自然科学研究会と共催	上治寅次郎(地質)・小清水卓二(植物)・筒井嘉隆(動物)・林匡夫(昆虫)の4氏	43名(内婦人9名)	2-9
	7月29日	生駒山採集会	林・辻本両氏指導	記入なし	2-9
	8月8日～10日	大台ヶ原山自然研究会 関西自然科学研究会と共催	奈良女子大小清水・西京大中根・博物館筒井・林・児玉の諸氏指導	70名	2-9
	8月19日	岩湧山の植物・昆虫採集会	筒井・堀・児玉・林・辻本の5氏指導	約500名	2-9
	9月15日	虫の声を聞く会 関西自然科学研究会と共催(奈良公園)	指導三重大学教授大町文衛氏	約100名	2-10
1957	2月10日	宇治田原化石採集会	市大藤田和夫助教授・学芸大赤塚久兵衛講師	約200人	3-3
	4月21日	あやめ池自然博物館見学会	川村・上治・小清水・津田・筒井の各講師指導	約25名	3-5
	5月18日・19日	岩湧山の鳥を聞く会	筒井・岡田・石原・御厨の4氏指導	132名	3-6
	6月1日・2日	比良山の自然をさぐる会	筒井・堀・林の3氏	30名	3-7&8
	7月22日～24日	稲村ガ岳・洞川自然研究会	筒井・日浦・柴田・瀬戸・赤塚・林・辻本の7氏	20名	3-9
	8月8日～10日	大台ヶ原山自然研究会	筒井・日浦・柴田・瀬戸・赤塚・佐藤の6氏	約30名	3-9
	8月18日	岩湧山自然研究会	筒井・日浦・柴田・瀬戸・岡田・林・辻本の7氏指導	約100名	3-9
	8月25日	生駒山自然研究会	林・辻本・日浦・柴田・瀬戸の5氏指導	約300名	3-10
	9月14日	秋の虫を聞く会(奈良公園)	三重大学大町教授・川村先生・小清水・津田・筒井・岡田・佐藤・堀・日浦・柴田・瀬戸氏ら	約100名	3-10

	9月21日	淀川堤の散歩	筒井・堀・瀬戸	150名	3-10
	11月9日	動物園の動物を見る会	筒井・吉田・中川の3氏指導	15名	3-12
1958	2月9日	奥山田化石採集会	赤塚・千地氏	約200名	4-3
	2月15日	天王寺温室を見る会	堀・辻本・瀬戸	約150名	4-3
	3月30日	早春の自然をさぐる会 (岩湧山附近)	筒井・瀬戸・且浦・辻本	約30名	4-4
	5月17日・18日	岩湧山の野鳥を聞く会	岡田・石原両氏と館長	127名	4-6
	6月14日	雑草を見る会	堀・瀬戸指導	56名	4-9
	6月22日	鉱物採集会(兵庫県多田 地方)	中村・真鍋両氏と千地・辻本・柴田学芸員指導	430名	4-9
	7月24日	能勢の自然をさぐる会	且浦・瀬戸・松浦	120名	4-9
	8月3日	友ガ島の自然をさぐる会	館長・中浜・千地・堀両学芸員	57名	4-9
	8月12日～14日	洞川・稲村ガ岳自然研究 会	千地・且浦・瀬戸・松浦	33名	4-9
	9月13日	秋の虫を聞く会(淀川 堤)	佐藤・且浦・中浜・瀬戸	50名	4-10
9月20日	第2回雑草を見る会(鞆 公園)	堀・瀬戸	65名	4-10	
	10月12日	シギ・チドリを見る会	藤原・岡田・御厨・3氏指導	17名	4-11
	10月18日	建物の石を見る会	千地・瀬戸両学芸員指導	40名	4-11
1959	2月8日	宇治田原化石採集会	阪大中世古講師・学芸大赤塚講師・千地・且浦両 学芸員・松浦	268名	5-3
	5月16日	市内の雑草を見る会	瀬戸・堀	600名	5-6
	5月16日・17日	岩湧山の鳥をさぐる会	平松・岡田・石原・辻本・松浦	107名	5-6
	6月7日	磯の生物観察と水族館見 学の会(淡の輪)	辻本・柴田・瀬戸	145名	5-7
	7月16日	夜の動物園を見る会	記入なし	50名	5-9
	7月26日	生駒山の自然に親しむ会	辻本・且浦・瀬戸・柴田	200名	5-9
	8月9日～11日	洞川の自然をさぐる会	中浜・辻本・瀬戸・柴田	17名	5-9
	8月13日～15日	剣山の自然をさぐる会	筒井・千地・瀬戸・且浦	67名	5-9
	8月23日	岩湧山の自然をさぐる会	筒井・辻本・且浦・瀬戸	50名	5-10
	9月12日	虫の声を聞く会	講師佐藤納氏・且浦	70名	5-10
10月11日	第一次友ガ島リス狩り	筒井・辻本・柴田・山田	80名	5-11	
12月22日～23日	第二次友ガ島リス狩り	筒井・辻本・柴田・山田	40名	6-2	
1960	2月7日	宇治田原化石採集会	千地・辻本・柴田	220名	6-3
	3月18日	植物・昆虫の生態写真撮 影と採集(信太山)	辻本・且浦・瀬戸	記入な し	6-4
	4月16日	淀川堤の雑草をみる会	瀬戸・且浦	150名	6-5
	4月17日	友が島自然見学会	筒井・辻本・瀬戸	57名	6-5
	4月19日	植物・昆虫生態写真撮 影及び採集於信太山	辻本・且浦・瀬戸	記入な し	6-5
	5月7日・8日	岩湧山鳥の声をさぐる会	岡田康徳・石原忠一・筒井・辻本・柴田	65人	6-6
	5月21日	帰化植物を見る会(於堺 市湊付近)	瀬戸	60人	6-7
	5月29日	磯の生物観察会(於岬 町)	辻本・柴田・瀬戸	85人	6-7
	6月25日	市内の街路樹を見る会	杉山文雄・瀬戸剛	70名	6-9
	7月26日～28日	少年自然科学教室(於岩 湧山)	館長ほか全学芸員	30名	6-9
	7月31日	能勢の自然に親しむ会	辻本・且浦・柴田・瀬戸・森本	250名	6-9
	8月13日～15日	洞川の自然をさぐる会	辻本・且浦・瀬戸・森本	38名	6-9
	8月21日	信貴山の自然に親しむ会	辻本・且浦・瀬戸・山田	110名	6-10
	9月3日	虫の声を聞く会(於博物 館及び城北公園)	佐藤・且浦	90名	6-10
	10月16日	鉱物採集会(於大間歩)	真鍋・千地・辻本・瀬戸・森本	360名	6-11
	11月13日	モンキーランドと菊の見 学会(於枚方パーク)	辻本・柴田・瀬戸	40名	7-1
1961	2月19日	化石採集会(於京都宇治 田原)	石井・千地・辻本・柴田	150名	7-4

注) 館長・専任学芸員・常勤嘱託・事務職員(中浜康一は1957年4月17日、主査として着任、松浦泰治は1957年5月27日、見習として着任)にはアンダーラインを付した。

表2 「Nature Study」誌「執筆者の横顔」欄のまとめ

執筆者の横顔No.	執筆者名	掲載内容	N. S. 掲載巻号	掲載N. S. 発行年月日
1	筒井嘉隆	大阪市立自然科学博物館館長	I-6	1955/11/1
2	堀勝	小・中学校長を歴任。『大阪府植物誌』『地質時代の生物』『原色植物図集』『原色昆虫図集』『原色水産植物図集』『学生植物図鑑』等の著書がある。昭和26年4月以来、博物館の資料収集・科学教育指導に専念、筒井館長とのよきコンビとして、博物館開設の日を待っている。近畿植物同好会会長・大阪山草会会長	I-7	1955/11/1
3	岡田康稔	関西食糧新聞社編集長、『Nature Study』の編集長(?) 日本野鳥の会全国委員、博物館嘱託	I-8	1955/12/1
4	佐藤納	小学校の先生で現在追手門学院勤務。中学校で昆虫同好会を、池師で博物同好会を作る。ハチへの興味を続けている。	II-1	1956/1/1
5	八木沼健夫	数少ないクモ学者の中で特に分類学を専攻。新種として命名したものが相当ある。現在追手門学院高校の生物の先生。東亜クモ学会の創立会員で事務所を勤務校に置く。大阪府高校生物教育研究会常任委員、博物館嘱託	II-2	1956/2/1
6	林匡夫	呉服商 船場のボンボン 友人とともに近畿甲虫同好会創立、機関紙『昆虫学評論』の編集を担当。	II-3	1956/3/1
7	伊賀正汎	城北公園の「植物と昆虫の会」メンバー。戦後友人数人と近畿甲虫同好会を創立。現在その幹事。貝に興味を持ったのは昭和28年夏、博物館の土佐沖の島調査の際磯採集を手伝ったのがきっかけ。本業は歯医者さん。博物館嘱託	II-4	1956/5/1
8	河野洋	城北公園の「植物と昆虫の会」大阪府昆虫駆除指導官、現在大阪府衛生部環境衛生課勤務。昆虫、カニ。博物館嘱託。トカラ調査の一員	II-5	1956/9/1
9	赤塚久兵衛	大阪学芸大学講師 専門は鉱物学 博物館とは25年発足当時から関係で、主だった調査には必ず参加して重要なメンバー。博物館嘱託	II-6	1956/6/1
10	辻本修	堺市立浅香山中学校の理科の先生。北山峡調査の時から生態写真を専門に撮り出し、アサヒ写真ブック等に収録されている。中学時代から甲虫に興味をもち、写真技術と動植物学の知識を併せもつ得難い専門家。博物館嘱託	II-7&8	1956/7/1
11	児玉務	本職は学校の先生、現在博物館の学芸員。専門はシダとコケ(苔類)の分類と分布の調査。	II-9	1956/9/1
12	中根猛彦	昭和26年4月～西京大学助教授、甲虫の分類 博物館とは北山狭以来のおなじみ。トカラ調査にも参加した。京都甲虫同好会と近畿甲虫同好会の幹事 『あきつ』2巻8冊は氏の編集	II-10	1956/10/1
12(ママ)	引田茂	府立夕陽丘高女勤務一府立夕陽丘高校勤務 大阪府高校生物教育研究会常任委員。世界ではじめてイチョウの遺体発見。Science誌上にも論文を発表。北山狭・小豆島等の科学調査のメンバー 博物館グループの1人で評議員	II-11	1956/11/1
14	御勢久右衛門	五条高校の生物の先生。水生昆虫の生態学的研究のよきフィールド・ワーカー。	II-12	1956/12/1
15	東光治	(鳥取砂丘の生態を研究中発病)もと大阪府史蹟名勝天然記念物調査委員 大阪経済大学教授 大阪音楽短期大学教授 もと大阪府社会教育委員 著書に『万葉動物考』ほか	III-10	1957/10/1
16	大倉正文	日本産業機械工業会関西支部のエライ人 「植物と昆虫の会」の設立に協力以来「関西昆虫学会甲虫部会」「近畿甲虫同好会」の世話を続ける。歩行虫専攻 博物館の北山峡や荒神、伯母子等の調査に数回参加	III-11	1957/11/1
17	千地万造	京大理学部地質学鉱物学科に入学。卒業後大阪府立泉陽高校に勤務しながら京大大学院生として、研究と教育の二重生活を8年間続けた。化石有孔虫と取り込む。	IV-2	1958/1/1
18	吉田平七郎	京阪商業学校で20年間博物を、大阪市立高校で12年間生物を教えて来た。筒井館長とは動物園時代からのおなじみ。動物園関係の著書5冊、「動物文学会」の評議員。	IV-3	1958/3/1
19	瀬戸剛	植物部門担当 組織立った採集は昭和25年京都大学の田川基二博士からシダ植物の手ほどきを受けて以来のことである。博物館とは北山峡調査以来のおなじみである。	IV-3	1958/4/1
20	坂口浩平	現在阪大微研の森下教授の下で、ノミの分類学的研究を行っている。研究の動機は、昆虫学と哺乳類動物学と鳥学とにわたっていて収集に最も困難を伴うので妙味があるからだという。近畿甲虫同好会幹事 実は灘の銘酒「寿梅」の醸造元	IV-5	1958/5/1

21	柴田保彦	両生類のマニア 高校時分には手を広げて海や山へ出かけ、博物館の北山峡調査にも参加。広島大学理学部にて、サンショウウオの交雑研究を行った。	IV-6	1958/6/1
22	日浦勇	九州大学農学部出身、卒論はハナカメムシについて。卒業後2年間徳島の高校につとめたが、頭がすえないうちにと大阪へ飛び出してきた。	IV-9	1958/9/10
23	緒方正美	幕末の蘭医緒方洪庵の血統をひく名門 戦後はチョウ・ガの交尾器研究で名をあげ、更にガの研究に進んで、現在では『原色日本蛾類図鑑』の著者の1人。日本鱗翅学会幹事 緒方病院副院長	V-3	1959/3/10
24	中川宗次郎	道修薬学校卒、薬剤師 生薬学一薬用植物等を学び、藤井潔・堀江聰男氏らと大阪植物同好会結成	V-4	Apr-59
25	石原忠一	現在豊中で、郷土の生物相の調査と、理科授業への資料の提供、自然保護の3つを目標にして、生物同好会の仲間と研究を進めている。教育委員会・公民館・児童館などの”自然を学ぶ会””生物の会””島の会”などの世話をしている。豊中市立第四中学校教諭	V-5	1959/5/10
26	池辺展男	大正元年生まれ。地質学。昭和22年京都大学助教授、昭和25年から大阪市立大学教授。自然科学博物館とは北山峡調査以来のおなじみ。	V-9	1959/9/10
27	三木茂	明治34年生まれ。大阪市大教授。メダセコイヤ発見の業績により朝日文化賞、京都文化院賞を受賞。自然科学博物館とは創立以来縁が深く、北山峡・トカラ諸島・小豆島・伯母子等の調査に参加。	VI-1	1960/1/10

者に御一任願います」と回答している²⁴が、これは学問上の水準を意識した館活動を端的に示す表現と言えよう。もっとも、浜谷は高校教員であり、1961年1月号以降、海岸生物に関する諸記事を『Nature Study』誌上に投稿している²⁵。

天王寺美術館間借り・大阪市立自然科学博物館後援会時代には、「幽霊博物館」の汚名を返すべく、博物館の建物を求めて、館長1名、事務吏員1名、1～2名の日勤嘱託の体制を、研究者、小・中・高の教員、大阪周辺のアマチュアの奉仕が支え、活発なミュージアム・エクステンションが展開されていた²⁶。表1の1957年春までの指導者名一覧で分かるように、いわゆる博物館グループ（後援会の主力メンバー）が筒井や堀とともに、館の教育普及事業の指導者となっていた。また、『Nature Study』誌「友好団体の紹介」欄には、近畿植物同好会、関西自然科学研究会、近畿甲虫同好会、大阪貝類談話会、東亜蜘蛛学会、日本シダの会関西談話会、日本野鳥の会大阪支部、大阪地学懇談会、大阪府高校生物教育研究会、大阪学生愛鳩会、フラワー・ソサイエティー、京都植物同好会、日本鱗翅学会、大阪府下高等学校生物連盟の14団体が紹介されており、これら友好団体の中心的メンバーは後援会の主力メンバーと重なる部分が多かった²⁴。

先ほど述べた、一会員からの質問と、筒井館長からの回答や、『Nature Study』誌「執筆者の横顔」欄のまとめ（表2）からも、後援会主力メンバーは、

表3 博物館後援会時代の『Nature Study』（1955年創刊号～1958年4月号）掲載
個人別単著記事本数一覧

人名	単著記事本数	注記
筒井嘉隆	61	館長
堀勝	37	常勤嘱託
辻本修	32	
八木沼健夫	29	
岡田康稔	23	
佐藤納	23	
林匡夫	22	
児玉務	20	研究員→学芸員
河野洋	16	
赤塚久兵衛	15	
東光治	11	
御勢久右衛門	10	

市民といっても「町人学者」と称される、ハイレベルなアマチュア（生物・地学関係の同好会や研究会の世話役クラスの人々）であったことが分かる。また、筒井は「いかもの」を好む悪食家でもあり、「悪食の常連」として親交を深めていたメンバーも博物館活動を支えていたが、このメンバーも、大阪市助役から衆議院議員となった和爾俊二郎や、心齋橋筋の貴金属商店に生まれた尼崎博（関西自然科学研究会事務局長）、岡田誠三朝日新聞記者など²⁵、高学歴者や社会的地位の高い人々であったことが分かるのである。

博物館後援会時代の『Nature Study』（1955年創刊号～1958年4月号まで）掲載の個人別単著記事本数をデータベース²⁶上で集計した結果が表3である。3年弱の期間に書かれた総数594本の記事のうち、データベースに収録された単著記事は463本、そのうち10本以上の記事を書いたのは12名であり、筒井館長が61本で最多、続いて囑託の堀（1951年4月以来の勤務）の37本、残りの365本は、一時期研究員であった児玉や囑託の扱いであった後援会の主力メンバーを中心とする館外の人々によって書かれた記事であった。

一方、「研究会や館の仕事に奉仕」していた川島奎子のような女性もあり、「美術館の二階で標本用の新聞紙を特製の乾燥機で乾燥していた頃が、つい昨日の様に思い出されます。研究会の費用も不足で、郵便料を節約しようと、学校に配るNature Studyを市役所の運送便に託す為、リュックで担いで行った日のことが懐かしく思い出されます」との回想も残っている²⁷。後援会時代に関わった女性についてはわずかの記録しか残されておらず、男性中心に後援会活動が行われていたことが窺える。

『Nature Study』誌に毎月掲載された「博物館の日誌から」には、後援会主力メンバーが、博物館行事打合せ会や『Nature Study』編集会議、忘年会や博物館開館準備打合せに出席している事が、記録されている²⁸。この間の事情を、靱での開館に際して筒井は「この間、紀和国境の山深く、あるいは南海の孤島に、私たちと苦労を共にして、資料の収集に、或はその整理研究に、又館の運営にまで熱心にご協力下さった方々のお力添えは、まことに言葉につくせぬ有難いものございました²⁹」と述べている。1956年12月6日には後援会が大阪市教育委員長宛に、12月18日には大阪市長宛に博物館建設促進のための陳情書を提出した³⁰。

後援会時代、その規約には（目的）「本会は大阪市立自然科学博物館（以下博物館と言う）の運営に協力し、その活動を援ける」と書かれ、事業として「博物館の運営、企画について建言し、その相談に応じる」「博物館の事業を援助する」「博物館の施設の充実をはかる」と書かれている³¹。この美術館での間借り時代、後援会メンバーはその構成に専門家という偏りはあるものの、まさに館の運営にまで積

極的に関わっていたと推定されるのである。

3. 靱への移転―「大阪自然科学研究会」への転換と研究サークルの育成

筒井館長及び後援会メンバーによる積極的活動の結果、大阪市立自然科学博物館は1956年12月26日、西区靱の元小学校校舎の一部によりやく移転が内定し、1957年6月7日に引越しをした。当時の大阪市の財政事情では、地域の人呼んで「お化け屋敷」という旧靱小学校の校舎は、最小限の内部改装しかできず、2階・3階の各3教室と廊下を打ちぬぎ、資料室の窓は内側からベニヤ板を張りつけて遮光し、展示室は窓際にケースを並べたり、解説パネルを立てて遮光する、といった有様だった。人員としては新たに千地万造、辻本修、日浦勇、柴田保彦、瀬戸剛の5人の学芸員が専任され、事務吏員4名、用務員2名、囑託1名の体制で1958年1月13日の開館を迎えた³²。

天王寺から靱に移った後、1958年3月29日の第3回総会で、博物館後援会は「大阪自然科学研究会」と名称を変更し、規約も改正された³³。名称変更の理由は、これまではPTA会費から後援会会費（主に学校会員からなるA会費）を支出していたのが、この頃から、PTAの会計処理が厳密に行われるようになり、市立博物館後援会への支出が難しくなってきたためであった³⁴。また、後援会時代の規約にあった「（博物館の）運営に協力して、その活動を援ける」という文言は、「博物館の事業に協力して、楽しく自然を研究し、自然科学の普及発展に寄与するとともに、会員相互の親睦をはかることを目的とする」と変更された。筒井は、館長挨拶として「博物館の脱皮と共に後援会も大きく転換して、自然科学研究会として再発足することになったのは当然の過程であり、結構なことと思う。評議員については一任されたのであらためてお願いする」と述べ、博物館を形あるものにするための後援会が靱でのオープンによって当初の目的を達成したという一つの区切りを示したのであった³⁵。

野外での館の教育普及活動の指導は、表1に示すように、1958年以降、これまでの後援会評議員に大きく依存していた形態から、学芸員が主として担当する形態に徐々に変化していく。変化の内容を詳し

く見ると、植物及び昆虫関係の行事の指導は相互乗り入れ可能で館学芸員だけでも指導可能となったが、地学または鳥関係単独の行事の場合は、まだ館外の指導者に頼る必要があったのである³⁶。

一方、新しい形の博物館のファンも生み出されていった。谷幸三は「思いおこせば、日浦勇先生との出会いは、昭和33年に大阪市立自然科学博物館に勤務された直後に、当時中学生であった私が、ハチについて拙い質問をした^(マツ)昆虫研究室を訪れたのが始まりです。以来25年間日浦先生の不肖の弟子として公私ともにご指導を仰いでできました³⁷」と書いている。また、津田滋は「私が日浦先生と識り合ったのは、まだ博物館が鞆にあった昭和35年頃のこと、トンボでも集めてみようかと思って訪れたのが始めてでした。博物館が私の勤務先からの帰路にあったことから、土曜日の午後などはよく訪れたものでしたが、先生は素人の私などにも厭な顔一つ見せず、快く応対して下さったものでした。私の属する関西トンボ談話会はそれから暫くして日浦先生の呼びかけのもとに、何人かのトンボに興味を持つものが集まってできたものであります³⁸」と記している。日浦はこの頃の状況を「1962年4月に関西トンボ談話会が正式発足したとき、同好者は15名になっていた。職業的昆虫研究者は私一人で、あとはお医者さんとか、繊維や鉄や油の技術屋さんが多かったことが、この会のムードをきわめて学究的にした原因ではないかと思っている³⁹」と後に説明している。

1961年4月号を最後に、『Nature Study』誌上に「博物館の日誌から」の掲載がなくなり、行事や会議の事後記録が姿を消した。5月号の行事予定では、指導者は個人名ではなく、博物館学芸員という表記で紹介されるようになった。これら一連の変化は、博物館館内の事務職員と学芸員との確執が原因であった⁴⁰。年度途中で中途採用された学芸員側は市役所内部の事務について不慣れであり、一方、たたき上げの事務職員の目には、学芸員の態度は鼻持ちならぬものに写り、『Nature Study』誌上に学芸員個人の名前が記載されることを不快としたのである。事務職員側は、大阪自然科学研究会は博物館ではないのだから、『Nature Study』の編集を勤務時間内に学芸員が行うのは規則違反だと主張し、一方、学芸員側は、形式こそ直営ではないが、『Nature

Study』の編集は館の普及活動のための大切な仕事だと主張した。後援会から研究会への名称変更の際、市教育委員会に書類を上げて了承を得ていたこともあり、『Nature Study』の編集は結局学芸員の正規の仕事として認められることになったが、研究会会費等の金銭の取り扱いが館外の間が行うべきだとする事務職員側の主張が通り、1961年3月末からは、研究会の事務処理のために、アルバイトの若い専属者が置かれるようになった。学芸員側からは、事務職員にも普及活動の様子を理解してもらうため、館外普及活動への参加を求めた(表1参照)。

大阪自然科学研究会は、1960年から頻繁に会則・規約の変更を行っているが、その最大の理由は、会計を豊かにするための会費の値上げであった。会員数は1960年から減少しはじめ、1959年4月の段階でA会員256名、B会員304名であったのが、1960年3月末にはA会員241名、B会員281名となり、その後も1965年まで特に学校単位の加入が中心のA会員数が伸び悩んだ⁴¹。1961年の7月からは、研究会独自の行事(映画会、採集会、標本同定会、A会員招待の自然映画会⁴²)がはじまったが、これらは新会員獲得や会員維持のために会員の特典を増やす試みであった。これまで有力な財源であった学校会員減少の原因は、市内の理科教員の興味が高度成長政策によって、自然観察から科学工作に変わってきたことや、学校の教材が野草から栽培植物に変わっていったことなどによっており、研究会独自の行事の開催による会員増加策は館側からの要請によるものであった。1960年～1963年ごろは、後援会から研究会に衣替えはしたが、古い後援会会員の側は積極的に会員増を行おうとせず、館側が会員増加策に悩み、その方法を模索していた時代であった⁴³。

1963年には、『Nature Study』6月号より印刷費が30%値上げになり、年度末には会誌の発行も危ぶまれている、と記されている⁴⁴。この頃には原稿の集まりも悪く、『Nature Study』に関わっていたら学芸員の仕事が出来なくなるとして、廃刊にしようという意見も学芸員の中から出されたが、継続することに意義があるという主張から、廃刊には至らなかった⁴⁵。

博物館主催の普及事業参加者数は、1959～1960年度をピークに次第に減少してきていた。こうした参

加者減に対して、千地万造の提案で、1964年度には、館の普及事業の主体として「親と子の自然を見る会」がスタートした。「不特定大衆でなく、ある層に集中して働きかけてみよう。その層は社会人と学校関係を包むことが望ましい。しかもなるべく継続的な指導をやってみよう」という発想での開設であった。この「親と子の自然を見る会」は評判がよく、参加の申し込みが950件もあった⁴⁶。「親と子の自然を見る会」の開設が誘引となり、1961年をピークとして減少傾向にあった会員数は、1966年には増加へと転じたのであった⁴⁷。

筒井館長は1964年7月、大阪市を退職し、引き続き嘱託として館長に就任し、1965年8月1日、千地万造に館長職を引き継いだ⁴⁸。韋の元小学校校舎の一部を利用した館は仮住まいという認識のもと、筒井は1961年度から新館建設予算要求を続けていたが、筒井の在職中には予算は通らなかった。1967年ごろ千地館長が教育長に提出した、自然史博物館の性格を記した建議書が、当時の加藤一男公園部長の目に止まり、長居公園植物園の中に自然史博物館を作れるよう中馬馨大阪市長に働きかけ、一方、当時大阪市の社会教育委員でありYMCA総主事であった奈良傳がやはり中馬市長に働きかけたのであった。大阪市立大学の初代理工学部長小竹無二雄も社会教育委員の答申書を書くだけでなく、直に中馬市長に会い、新館を立派なものにするよう建言したのであった⁴⁹。1969年度、大阪市教育委員会は自然史博物館建設のための審議会「自然史博物館基本構想審議委員会」をつくり、意見聴取を始めた。新館建設調査費を獲得したのは1970年度であり、基本構想に基き、具体的な計画案を立てる「自然史博物館建設委員会」がつくられた⁵⁰。長居公園での新館獲得に際しては、大阪自然科学研究会のメンバーが関与していなかった点が、天王寺美術館から韋への移転時とは大きく異なる点であった。

1966年10月、『Nature Study』は「明石海岸にアカシゾウを求めて」の特集を組んだ。これは、1960年当時中学生であった紀川晴彦が、6年間単独で同地点での発掘を継続した結果、97点に及ぶ長鼻類の化石を採集し、博物館に寄贈したのをきっかけに、1966年8月13日～15日にかけて、館外の研究者・学生を含む33名が参加して、博物館が全面的な発掘調

査を行った記録である。紀川、亀井節夫(京都大学助教授)の報告の他に発掘に関わった12名の感想文と、発掘参加者名簿が掲載されている。また、このアカシゾウ化石については、1975年、館の正式な研究報告に樽野博幸学芸員と紀川晴彦の連名で論文が掲載された(大阪市立自然史博物館業績第185号)⁵¹。

1967年の大阪自然科学研究会総会では、会員の声を『Nature Study』の編集や会の行事に反映させるために、アンケートが実施された。総会参加者97名のうち、54名が回答し、回答者の趣味・専門分野としては地学関係が多いという結果が出ている。「これからのNature Studyにどんな記事を望むか?」という質問に対しては、「第1線の研究者に、自分の研究の方法について解説、研究途上のエピソードの紹介をのぞむ。又、具体的な事実の解説の他に、理論的な展望記事をのぞむ」といった意見が取り上げられている⁵²。また、1967年に掲載された宮武頼夫(1967年から非常勤嘱託、1968年学芸員採用)の「大阪付近のセミについて」シリーズに関しては、会員からの「おたより」欄に「7月号の宮武氏の「大阪付近のセミについて」は大変有益で大いに参考となり、感謝しています。……こういう記事がありますと、ひとつ自分の居住地付近のセミ相でも調べてみようという野心が起こってまいりますから不思議です。今後もこんな形式でトンボの全種類の解説など、連載でお願いしたいものです。貴誌のあり方としては、こういう内容が本来の姿でなかろうかと考えます」といった感想が寄せられている⁵³。

1968年度に27名に上っていた研究会の評議員は、1969年には14名となり、評議員会のスリム化が図られると同時に、主婦代表として「親と子の自然を見る会」の参加者であった、藤田順子、向井栄子、野田庸子の3名が加わるようになった⁵⁴。評議員会のスリム化が図られたのは、後援会時代に評議員を依頼したメンバーが高齢化したり、有名無実化している状態を改め、行事に参加している会員に評議員として加わってもらうことを目的としていた。このスリム化の背景には、採用当時若手であった学芸員たちが、館の研究報告の発行や学会活動等によって学問的実力を身に付け、従来のアマチュア評議員層と実力上逆転してきたという実状があった⁵⁵。

1969年、博物館の2回目の海外学術調査として、

フィリピン群島の調査がフィリピン国立博物館との共同事業として行われた。この調査は自然科学研究会が受け皿となり、財団法人皓養社からの寄付を受ける形で、博物館から千地、日浦、瀬戸、宮武の4名が派遣された⁵⁶。こうした「積極的活動」の結果や、印刷郵送代が年間会費を超えていることなどから、自然科学研究会は会費の値上げを検討し、また評議員には、小学校の先生と父母の代表として新しく5名が選任された⁵⁷。

1970年12月には「200号記念特集“新館にのぞむ”」が生まれ、この中で井上清は「おかげで昭和25年に私がトンボに取り組み始めた頃には、和歌山の乾風（あなせ）さん、四日市の石田さん以外にはほとんど同好の士がいなかったのに、博物館を訪れる人びとが日浦さんを中心に自然にまとまって今では関西トンボ談話会は熱心なメンバー四十数人をようするに至った。博物館の生きた活動の成果の一端を物語るものである。200号を迎えるNature Studyが心の糧として果たした役割も測り知れぬものがある⁵⁸」と述べている。

博物館の周りに多くの人々が集まったその魅力は何だったのだろうか。日浦は、『自然観察入門』の「少し長いあとがき」に、「十六年のあいだ、仲間たち、とくに植物学担当の瀬戸剛さんにはじつに多くのことを教えていただいた。どんなときでも、どんな質問をしても、いま忙しいから後で、と言われたことは一度もない。私だけではなく、誰にたいしてもそうであった。個人生活を犠牲にしてでもであった。とても真似はできなかったが、普及ということにたいする瀬戸さんの姿勢は、つねに鏡であった⁵⁹」と書いている。

1973年刊行の柴田敏隆・太田正道・日浦勇編『自然史博物館の収集活動』においては、編者の共同見解として、「戦後の日本の自然史博物館の研究の姿勢は、一応For Civilian（市民のため、地域社会のため）がその根元となっている。しかし、数少ない戦前派の博物館の中には、For Science（科学のため、真理探究のため）の姿勢も根強く残っており、また各個人の学芸員をみると、For Scienceを第一義に採ってFor Civilianを観念的には軽視しないが、実際的には厄介扱いしているものも少なくはない⁶⁰」との主張がなされていた。

桂孝次郎・春澤圭太郎は高校生物部時代から児玉務・日浦らの影響を受け、博物館に通い、研究に取り組むようになっていた⁶¹。桂孝次郎は「日浦先生は僕のような一般のアマチュアを、一人前の研究者として扱ってくれました。共に歩き、共に勉強し、一緒になってオサムシや昆虫化石などを通して、昆虫学の前進に参加させてくれました⁶²」と回想している。日浦勇による研究サークルづくりは「トンボの飛ぶ季節は採集会を重ね、寒くなるとオンボロ博物館の一室で石炭ストーブを炊きながら一年間の経験の交流と討論会をやる。こうして1973年末で会員数は88名、機関紙は14号発行、例会28回、採集調査会73回といういささか堂々すぎるサークルになってしまった⁶³」という具合に進展していった。研究サークルのメンバーは全員が大阪自然科学研究会の会員という訳ではなかったが、サークルメンバーの9割程度は研究会の会員であった。不特定多数を対象とする博物館の普及行事イベントはその時だけの集まりで、系統的な学習のなされる学校教育とは大きく異なって、はかないものであった。この問題を解消するためには、興味を持った層を研究会に引き入れ、研究会の中でサークルを作りサークルを育てていくことが必要ではないか、という認識が学芸員の間で育っていったのである⁶⁴。日浦は1971年には近畿オサムシ研究グループを結成、同年、日浦勇・桂孝次郎（当時大学生）の共著で「信楽山地のマヤサンオサムシ」（大阪市立自然科学博物館業績第153号）が館の研究報告に掲載された⁶⁵。

新しい自然史博物館は1974年4月の開館に向け、1972年早々から工事が始まることになり、展示計画も進んでいった⁶⁶。研究会事務局の寺井妙子は、1972年には「来年度は新館オープン準備のため、博物館の普及行事がほとんどなくなる予定です。だからこそ研究会の事業を充実したいものです。研究会で育った会員の企画、自分たちで行事を行ってみようという意欲を来年は待っています」と記し、また、「47・48年度は新館への移転時期とあって、現状を維持するのがせいっぱいでした」と記している⁶⁷。1972年12月9日、研究会の緊急評議員会が開かれ、1973年度の事業計画が討議された。博物館の3月いっぱい閉館、移転の準備、夏に移転してからは今度は展示準備、という事情のもと、「研究会として

はすべてのお世話を博物館にお願いするわけにはいかず、どうしたらよいか」が討議され、「Nature Studyの編集は今まで通り博物館にお願いする。野外行事は博物館に負担をかけないよう回数をへらし、評議員が責任を持って行う」と決定している⁶⁸。この決定内容からして、靑時代には、かつての後援会の積極的な性格は失われ、学芸員側が自然科学研究会のお世話をするという方向に会の性格が変化していたことは明らかである。

もちろん、個々の会員と博物館とのつながりは濃厚で、靑から長居への移転に際しては、運送業者に任せられない取り扱いの難しい標本類を、当時運転免許証を持っていなかった学芸員に代わって、石友会の真鍋鶴松や昆虫関係の桂孝次郎らが自家用車で新館へ運ぶといった協力をした⁶⁹。「靑から長居へ移った現博物館がオープンする前夜のこと、準備を手伝った後みんなで飲んでいて、トイレに行ったはずの春澤が帰ってこない。心配して見に行くとい

レで寝てしまっていた⁷⁰」といった回想も後になされている。

1973年3月31日、長居公園新館移転準備作業のため、靑の旧館は休館となった。3月1日付で那須孝悌、4月1日付けで岡本素治、布村昇3名の学芸員が専任された⁷¹。この時期、学芸員側は日本で初めて自然史博物館を作るという大事業のために、新館での展示作りと標本の引越し作業で多忙を極め、自然科学研究会会員の側も、館をバックアップすること、でしゃばらないことを気遣い、新館オープンを待っていた⁷²。1973年8月末、山田清子は研究会事務局長退任に際し「毎月の発送の度にお手伝い下さった横山・向井・原田・萩原各評議員のおかあさん方に対しては心よりお礼申し上げます⁷³」と挨拶を書いており、この記述から主婦層評議員のボランティア活動が継続的に行われていたことを知ることができる。

11月1日付けで樽野博幸学芸員が着任⁷⁴、12月には会の20年目を意識して会員に対するアンケート調査が実施されている。1973年12月1日現在で、会員数総計1,105人、無作為抽出した122人へのアンケートの結果からは、男性110人、女性11人、不明1人、年齢別構成は10才代25.4%、20才代20.5%、30才代9.0%、40才代10.7%⁷⁵という若い男性中心の会の様子が浮かび上がってくる。

1974年4月1日付けで石井久夫学芸員が着任し、館は学芸員11人体制となり、4月26日に開館式、27日から長居公園内の新館が一般公開された。7月20日には研究会総会が開かれ、規約改正とともに、会は「大阪市立自然史博物館友の会」と名称変更された⁷⁶。海外でのMuseum Friendsと呼ばれる組織は、博物館側から特典を会員に与えるだけでなく、人的・経済的に博物館を援助する組織であるが、日本の友の会組織の場合は会員が特典だけを得ているのが現状であり、それならば博物館のファンをたくさん集めて、博物館をうまく利用してもらえばいいのではないか、友の会に対して館への応援を求めるのではなく、よりうまく博物館を利用したい人の会（利用者の会）に徹底したらいいのではないか、というのが靑時代を通しての学芸員側の結論であった⁷⁷。

大阪自然科学研究会時代の『Nature Study』（1958年5月号～1974年8月号）に掲載された記事

表4 自然科学研究会時代の『Nature Study』（1958年5月号～1974年8月号）掲載個人別単著記事本数一覧

人名	単著記事本数	注記
日浦勇	136	学芸員
辻本修	99	学芸員
瀬戸剛	57	学芸員
柴田保彦	46	学芸員
佐藤納	29	
千地万造	26	学芸員→1965年8月1日より館長
宮武頼夫	24	学芸員
筒井嘉隆	21	1965年7月末まで館長
堀田満	19	
両角芳郎	17	学芸員
波田重熙	16	学芸員
永瀬幸一	15	
林匡夫	13	
八木沼健夫	13	
岡田康稔	13	
児玉務	13	
堀勝	12	1959年3月末まで常勤嘱託
真下弘	12	
阪口浩平	11	

の総数は1,558本、そのうち署名記事は1,326本あり、表4が示す通り、旧館時代からの学芸員（含む常勤嘱託）計10名で計452本（日浦勇の136本が最多）を書いていた。戦時代は、自然科学研究会そのものの活気が失われ、会員減少と財政悪化に絶えず苦しみながらも、その一方で、活発な研究サークル活動や、アカシゾウの発掘調査に代表されるような市民参加型調査が行われ、『Nature Study』がその成果発表の場として学芸員側の多大な苦勞の末、維持され続けた時代と言えよう。

4. まとめと考察

大阪市立自然科学博物館時代の前半、天王寺美術館間借り・大阪市立自然科学博物館後援会時代、筒井館長率いる博物館後援会の主力メンバーは、市内学校標本の整理や修理、資料収集を兼ねたエクスペディションに参加し、普及行事の指導をし、月刊普及誌『Nature Study』を発行し、博物館の建物を獲得するための陳情をした。博物館行事打合せ会や『Nature Study』編集会議等に出席し、後援会規約の文字通り「博物館の運営、企画について建言し、その相談に応じる」「博物館の事業を援助する」「博物館の施設の充実をはかる」積極的な関わり方をしていたのであった。ただし、博物館の運営や調査収集活動に加わったのは、市民とは言っても、研究者・学校教員・いわゆる船場のボンボンと称されるような「町人学者」達を中心であった。

後半、戦の旧館・大阪自然科学研究会時代には、仮住まいで老朽化していたとはいえ博物館固有の建物が出来、複数の専任学芸員が採用され、後援会時代のリーダーたちからの援助を受けなくても館が自立した運営ができるように成長した。その反面、学校での理科教育の変化の影響で学校会員からの会費収入が望めなくなり、個人会員、特に家族参加という形で、新しい博物館のファン層を増やしていった時代であった。地学分野での発掘調査や、日浦勇が中心となり作られていったトンボやオサムシの研究サークルなど、大阪自然科学研究会と部分的に重なりあいながら、博物館をベースとする参加型調査が定着していった。

以上のことから、大阪市立自然科学博物館時代の市民参加について考察するならば、天王寺美術館時

代は形のないものを獲得してゆくために、筒井館長と社会的・経済的地位に恵まれた研究者・学校教員・ハイレベルなアマチュアたちが、緊密かつ対等あるいはそれ以上の力関係で博物館獲得運動を繰り広げた時代であった。戦時代には新規採用された若手の学芸員たちは、新たに自分たちと行動を共にする若い市民層を求めると同時に、館の運営面への市民参加ではなく、調査研究・標本収集面での市民参加を押し進めたと言えるのである。

戦時代を通じての学芸員側の結論は、大阪自然科学研究会に対して、館への応援を求めるのではなく、利用者の会に徹底させるということであった。この方針は、市民の調査研究・標本収集以外の面では自発性・積極性を後退させ、後に「友の会」の受益者団体化を進行させる結果につながっていったのではないかと考えられるが、この点については、本稿の続編で続けて検討したい。いずれにせよ、戦時代は、長居新館移転に伴い大阪自然科学研究会が「友の会」へと位置づけ直されるための過渡期であった。

伊藤寿朗は第三世代の課題を先取りしたような館として、大阪市立自然科学博物館を取り上げた時、「1960年代より」と記述している。この1960年代とはまさに、共同発掘調査や研究サークル作りが始まった時代であり、「市民参加の地域共同調査・共同研究」という意味で、伊藤の記述には誤りがなかったことになる。もちろんハイレベルなアマチュアたちを「市民」と捉える時、博物館創設当時の1950年代から、「市民参加の地域共同調査・共同研究」は行われていた。1950年代という時代的制約を考える時、日曜科学者（naturalist）のセンターたらしめたいという構想⁷⁸を実現させた筒井初代館長の先見性は高く評価されるべきであろう。

一方、伊藤の「第三世代の博物館」論には運営面で、博物館協議会の項目に「市民意志の反映の場として、市民代表の参加と権限の行使を保障（審議内容の公開）」という記述がなされている⁷⁹。大阪市立自然科学博物館の場合、『Nature Study』誌の創刊号には「博物館協議会」という名称で、後援会の主力メンバーたちが参加した会議の記録が残っている⁸⁰。この「博物館協議会」は3・4合併号以降、「行事打合せ」や「編集打合せ」と書かれるようになる⁸¹が、博物館後援会時代は、「市民」たちが積極的に館の

運営にまで「手も口も出す」という意味での市民参加の時代であった。皮肉なことに、館の充実と共に、館の運営は学芸員という専門家の手に移り、市民は「学習者としての主体的な学び」へと導かれていったと言えよう。もっとも、大阪自然科学研究会の時代に「市民」の幅は家族連れでの参加という意味で、その裾野を広げた。ただし、会員の約9割は男性であり、また10～20歳代の会員が半数近くを占め、女性の参加は補助的なボランティアで「お母さん」的役割にとどまっていた。

伊藤寿朗の「第三世代の博物館」論に関しては精緻化が必要であり、ここでは以下の2点を問題として提起したい。第一に、固有の土地、建物、資料、専門職（学芸員）を有する既存の博物館において、（仮に建設促進運動に市民が深く関わっていたとしても）市民による「運営への参加」は、職業として常駐する学芸員とボランティア市民との時間的制約や立場の違いを考えるならば、現実には不可能に近い。第二に、学習面については、博物館や学芸員の存在をきっかけとして、個々人の「主体的な学び」は成立可能であるし、研究サークルにおいては、市民の自主運営は可能である。しかし、博物館友の会に関しては、博物館資源に立脚する限り、市民の側の完全な自主的運営はありえないし、伊藤は「一定期間を経たら自主グループへの独立をうながす」と書いているが、大阪市立自然科学博物館の場合、日浦をはじめとする学芸員の人間的魅力が市民研究者を育て上げていったことから考えると、伊藤が提唱したような自主グループへの独立が理想とは簡単には言い切れないのである。

最後に、伊藤理論の最大の問題点は、「市民参加」という時の「市民」とは誰であるかを明確に定義しなかったことだと思われる。これは伊藤個人の問題ではなく、日本ではプライバシー保護の観点から、これまで利用者の属性に関する調査研究はほとんどなされてこなかった。「市民参加」という時、その参加はどの部分（企画運営、資金調達、調査研究、教育普及、資料整理、労力提供など）での参加なのかを明らかにし、「市民」の実態と「参加」の諸相を結びつけて論ずる必要がある。大阪市立自然科学博物館の場合は、創設当時に比べて、年齢に関しては博物館活動への参加者の年齢の幅は広がって

たが、性別に関しては圧倒的に男性中心のままであった。社会階層上の偏りが戦時時代に改善されたかは、現在公表可能なデータからは明らかにすることができない。「市民」の参加は後援会時代には、企画運営、資金調達、調査研究、教育普及、資料整理、労力提供のすべての方面に、また自然科学研究会時代には、調査研究、資料整理、労力提供に狭まっていたと思われる。

今日、国・地方自治体の財政悪化に伴い、協治（governance）という名で市民参加が行政当局から求められている状況にあるが、大阪市立自然科学博物館の事例は、市民が博物館活動に参加しうる範囲、限度について一つの貴重な実例を提示していると考えられる。本研究は追手門学院大学「特色ある個人研究費」（2001年度）の一部を用いてなされたものであることを付記しておく。

【謝辞】 本稿を準備するにあたって、大阪市立自然史博物館の那須孝悌館長、1日ばかりでNature Studyのバックナンバーを揃えてくださった樽野博幸研究主幹をはじめとして、元館長、新旧学芸員の皆さん、友の会の皆さんほか、多くの方々にお世話になった。聞き取り調査に応じてくださったのは那須館長をはじめとする以下の方々である。大阪市立自然史博物館元館長の千地万造氏、宮武頼夫氏、もと学芸員の瀬戸剛氏、布村昇氏、布谷知夫氏、学芸課長代理の山西良平氏、友の会会長の西川喜朗氏、友の会もと評議員の山本博子氏、八木剛氏、現評議員の白木江都子氏、桂孝次郎氏、梅原徹氏、六車恭子氏、NPO 法人人と自然の会理事の清水文美氏。また、現学芸員の川端清司氏、初宿成彦氏、和田岳氏、佐久間大輔氏からも貴重なお話や資料を提供していただいた。心からお礼申し上げます。

【註】 典拠の大半を占める『Nature Study』誌については以下N.S.と略記する。

- 1) 竹内順一「第三世代の博物館」瀧崎安之助記念館『冬晴春華論叢』第3号、1985年、73-88頁。
- 2) 伊藤寿朗、『市民の中の博物館』吉川弘文館、1993年、153頁、同『ひらけ、博物館』岩波ブックレットNo.188、1991年、16頁。
- 3) 伊藤「地域博物館論—現代博物館の課題と展望」

- 長浜功編『現代社会教育の課題と展望』明石書店、1986年、233-296頁。
- 4) 『大阪市立自然科学博物館館報』1 (1964年度)、1965年、7頁。
 - 5) 「座談会 博物館の幼年期を語る」N.S.4-2、1958年、8-10頁、筒井嘉隆「博物館15年の思い出」N.S.10-9、1964年、10-11頁。
 - 6) 同「座談会 博物館の幼年期を語る」、堀勝「創設当時の思いで」N.S.16-12、1970年、13頁、千地万造「博物館づくり—歴史的経過と基本的な考察」大阪市立自然史博物館『大阪市立自然史博物館館報』特別号、1975年、2-14頁(初出は日本博物館協会『博物館研究』第10巻第2・3号、1975年、2-14頁)。
 - 7) 筒井、前掲「博物館15年の思い出」。1950年の夏休みを利用して専門家15名、市内の17高校の生物部の生徒120人を動員し、手分けして市内の各小・中学校をまわって、そこにある標本を全部調べ上げて整理させ、「分類別大阪市内学校標本所在表」に編集印刷し、小学校180校、中学校60校計240校に配布して、相互に利用できるようにした。この時、堀勝、赤塚久兵衛、辻本修、真鍋鶴松、山本寅代らが協力した。
 - 8) 前掲「座談会 博物館の幼年期を語る」。
 - 9) 筒井『町人学者の博物誌』河出書房新社、1987年、17頁、213-214頁、筒井、前掲「博物館15年の思い出」。天王寺動物園時代には、同定会の後で展示会を行い、出来の良い標本を展示する一方、中学生採集座談会が開催され、林匡夫、河野洋、大倉正文、伊賀正汎など10数名が集まった。
 - 10) 瀬戸剛元学芸員からの聞き取りによる。
 - 11) 前掲「座談会 博物館の幼年期を語る」、前掲「博物館15年の思い出」。
 - 12) 前掲「座談会 博物館の幼年期を語る」「執筆者の横顔(3) 岡田康稔氏」N.S.1-8、1995年、9頁。北山峡調査は新聞各社によって大々的に取り上げられ、その影響を受けた当時近鉄事業部にいた尼崎博(関西自然科学研究会の近鉄側世話役)は、朝日新聞社の岡田誠三と相談の上、大台・大杉谷調査(1953年8月)を立案し、近畿日本鉄道がスポンサーになった。沖ノ島調査は阪口が立案した。また「北山峡グループ」のメンバーは、トカラ列島の調査に参加したメンバーを加えて筒井から北山峡・トカラ以来のいわゆる「博物館グループ」と呼ばれたりした(筒井「はじめに」大阪市立自然科学博物館『信貴・生駒の自然 自然研究の手引1』N.S.臨時増刊、1957年、2頁)。
 - 13) 小豆島調査(1954年)は関西汽船が企画し、北山峡以来顔なじみとなっていた産経新聞社の永田を仲介として、館に申し出があった。その他友ヶ島(1954年~1955年にかけて5回、南海電車)、紀淡海峡、比良山(1956年、京阪電車)などの調査が行われた(前掲「座談会 博物館の幼年期を語る」)。在阪のアマチュアの起用については、筒井、前掲『町人学者の博物誌』217頁。
 - 14) 朝日稔「筒井先生と私」筒井、前掲『町人学者の博物誌』241頁。
 - 15) 北川尚史「児玉務さんのこと」道盛正樹編『ええもん見つけたな 児玉務先生追悼著作集』児玉務先生顕彰記念事業会、1998年、23-27頁。
 - 16) 「おたより」N.S.1-2、1955年、6頁。
 - 17) 筒井「経過報告」N.S.4-2、1958年、6-7頁、同「“Nature Study”創刊の頃」N.S.16-12、1970年、12頁。
 - 18) 前掲「執筆者の横顔(3) 岡田康稔氏」。
 - 19) 岡田康稔「筒井館長を殺す?」N.S.16-12、1970年、13頁。
 - 20) 筒井「はじめに」N.S.1-1、1955年、2頁。
 - 21) 筒井「会員の声にお答え」N.S.2-6、1956年、8頁。
 - 22) 浜谷巖「後偲(さい) 類とは」N.S.7-1、1961年、6-7頁。同「大阪付近のウミウシ」N.S.7-2、1961年、8-11頁など。
 - 23) 筒井「Nature Studyと博物館」N.S.2-10、1956年、2-3頁、同、前掲「経過報告」、同、前掲「博物館15年の思い出」、千地、前掲「博物館づくり—歴史的経過と基本的な考察」。
 - 24) 以下のN.S.各号の「友好団体の紹介」欄参照のこと。N.S.1-2、5頁、N.S.1-3&4、14頁、N.S.1-5、8頁、N.S.1-6、8頁、N.S.1-7、8頁、N.S.1-8、10頁(以上1955年)、N.S.2-1、12頁、

- N.S.2-2、8頁、N.S.2-4、10頁、N.S.2-5、12頁、N.S.2-6、10頁、N.S.2-7、16頁、N.S.2-9、12頁、N.S.2-10、10頁（以上1956年）。
- 25) 筒井「正食記」前掲『町人学者の博物誌』22-53頁。
- 26) 大阪市立自然史博物館友の会『Nature Study総目次 通巻500号記念 1955-1995 1巻1号～42巻1号（1～500号）』1997年（フロッピーディスク）。
- 27) 川島奎子「新しい博物館建設に期待を寄せて」N.S.16-12、1970年、14頁。
- 28) 例えば、N.S.1-3&4、1955年、16頁、N.S.1-7、1995年、8頁、N.S.2-2、1996年、8頁、N.S.3-1、1957年、12頁、N.S.4-1、1958年、11頁など。
- 29) 筒井、前掲「経過報告」6-7頁。
- 30) 「博物館についての陳情」N.S.3-1、1957年、3頁。「かねてから本会の名誉会員・賛助会員の間で、大阪市長と教育委員長に対し博物館の建設促進について陳情をおこなう相談がなされていたが、11月5日に最後の打合せ会を開いて文章・手配等を決定した。・・・なお、賛助会員は全員が署名するとあまりに多数になるので、赤塚・佐藤両氏が代表した」と記されている。
- 31) 「大阪市立自然科学博物館後援会規約」N.S.1-2、1955年、7頁。
- 32) 筒井「年頭に当って」N.S.3-1、1957年、2頁、「博物館の日誌から」N.S.3-1、1957年、12頁、「おしらせ」N.S.3-6、1957年、12頁、千地『自然史博物館 人と自然の共生をめざして』八坂書房、1998年、58-62頁、筒井「年頭に当って」N.S.4-1、1958年、2頁、筒井、前掲「経過報告」、「学芸員の紹介」N.S.4-2、1958年、7頁。なお、日浦勇、柴田保彦は1957年4月から、館に勤務していた（N.S.3-5、1957年、12頁）。
- 33) 「大阪自然科学研究会規約」N.S.4-5、1958年、8頁。
- 34) 筒井、前掲「“Nature Study”創刊の頃」12頁、及び瀬戸元学芸員からの聞き取りによる。
- 35) 前掲「大阪自然科学研究会規約」、「博物館後援会第3会総会（報告）」N.S.4-5、1958年、9頁、及び千地元館長からの聞き取りによる。
- 36) 瀬戸元学芸員からの聞き取りによる。
- 37) 谷幸三「恩師 日浦勇先生を悼む」N.S.29-12、1983年、11頁。
- 38) 津田滋「日浦先生を偲んで」N.S.29-12、1983年、11-12頁。
- 39) 日浦勇『自然観察入門』中公新書、1975年、179-184頁。
- 40) 以下この段落の内容は「研究会だより」N.S.7-6、1961年、11頁、及び千地元館長・瀬戸元学芸員からの聞き取りによる。
- 41) 「大阪自然科学研究会第4回総会（報告）」N.S.5-5、1959年、10頁、「大阪自然科学研究会第5回総会（報告）」N.S.6-5、1960年、10頁、「大阪自然科学研究会第6回総会（報告）」N.S.7-4、1961年、10頁、「大阪自然科学研究会第7回総会の報告」N.S.8-4、1962年、7頁、「大阪自然科学研究会第8回総会の報告」N.S.9-3、1963年、11頁、「大阪自然科学研究会第9回総会の報告」N.S.10-3、1964年、10頁、「大阪自然科学研究会第10回総会の報告」N.S.11-4、1965年、39頁、「大阪自然科学研究会第11回総会の報告」N.S.12-3、1966年、8頁、「大阪自然科学研究会第12回総会の報告」N.S.13-3、1967年、5頁。
- 42) 「研究会だより」N.S.7-6、1961年、11頁、「研究会だより」N.S.7-7、1961年、8頁、「研究会だより」N.S.7-11、1961年、9頁、及び前掲「大阪自然科学研究会第7回総会の報告」。
- 43) 千地元館長からの聞き取りによる。
- 44) 「研究会だより」N.S.9-8、1963年、9頁。
- 45) 千地元館長からの聞き取りによる。
- 46) 「普及指導事業」『大阪市立自然科学博物館館報』1（1964年度版）、1965年、35-40頁、「博物館の昭和39年度普及事業・予定」N.S.10-4、1964年、11頁、および千地元館長からの聞き取りによる。
- 47) 注41に同じ。
- 48) 筒井「館長をやめて」・千地「会員のみなさんへ」N.S.11-9、1965年、7-8頁。
- 49) 千地元館長からの聞き取りによる。
- 50) 「新館建設への歩み」（1）（2）N.S.16-12、1970年、7頁、及び14頁。
- 51) 大阪市立自然科学博物館編「明石海岸にアカシ

- ゾウを求めて」N.S.12-10、1966年、7-15頁、樽野博幸・紀川晴彦「明石市八木より発掘されたアカシゾウ化石について」『大阪市立自然史博物館研究報告』No.29、1975年、1-14頁。
- 52) 「総会でのアンケートの集計結果」N.S.13-3、1967年、5-6頁。
- 53) 宮武頼夫「大阪付近のセミについて1」N.S.13-7、1967年、5-7頁、同「大阪付近のセミについて2」N.S.13-8、1967年、8-9頁、「おたより」N.S.13-9、1967年、11-12頁。
- 54) 「43年度総会のもよう」N.S.14-4、1968年、11頁、「44年度総会のもよう」N.S.15-4、1969年、15頁、及び宮武頼夫前館長からの聞き取りによる。
- 55) 千地元館長からの聞き取りによる。
- 56) 千地、前掲『自然史博物館 人と自然の共生をめざして』62頁、「研究会、フィリピンへ採集隊を派遣! 日浦・瀬戸・宮武さん 11月16日出発」N.S.15-11、1969年、2頁。
- 57) 「45年度研究会総会のもよう」N.S.16-4、1970年、15頁。
- 58) 井上清「新しい酒を新しい革袋に」N.S.16-12、1970年、5頁。
- 59) 日浦、前掲『自然観察入門』213頁。
- 60) 柴田敏隆・太田正道・日浦勇編『自然史博物館の収集活動』社団法人日本博物館協会、1973年、1-6頁。
- 61) (白木江都子)「桂孝次郎評議員と春澤圭太郎評議員」N.S.39-11、1993年、11頁。
- 62) 桂孝次郎「日浦先生と僕」N.S.29-12、1983年、12頁。
- 63) 日浦、前掲『自然観察入門』179-184頁。
- 64) 千地元館長からの聞き取りによる。
- 65) 宮武「サークル活動と博物館—大阪自然史博物館の歩みから—」『東北の自然』No.1、1985年、4-5頁、日浦・桂「信楽山地のマヤサンオサムシ」*Bulletin of the Osaka Museum of Natural History*, No.24, pp.15-27, 1978.
- 66) 両角芳郎「恐竜—アロザウルスの到着」N.S.17-12、1971年、10頁。
- 67) (寺井)「葛城山自然観察会」N.S.18-9、1972年、6頁、「研究会事務局長の交代」N.S.19-4、1973年、12頁。
- 68) 「48年度研究会の行事予定」N.S.19-1、1973年、12頁。
- 69) 布村昇元学芸員からの聞き取りによる。
- 70) 白木、前掲「桂孝次郎評議員と春澤圭太郎評議員」。
- 71) 千地「自然科学博物館が休館 いよいよ本格的に移転準備に」N.S.19-4、1973年、8頁、「新学芸員 那須孝悌さん」N.S.19-4、1973年、11頁、「新学芸員の紹介」N.S.19-5、1973年、12頁。
- 72) 布村元学芸員からの聞き取りによる。
- 73) 山田清子「事務局だより」N.S.19-9、1973年、12頁。
- 74) 「新学芸員の紹介」N.S.19-12、1973年、12頁。
- 75) 「研究会より」N.S.20-1、1974年、8頁。
- 76) 「新学芸員の紹介」N.S.20-5・6、1974年、12頁、「お待たせしました新館オープン」N.S.20-4、1974年、12頁、「大阪市立自然史博物館友の会規約」N.S.20-8、1974年、4頁。
- 77) 千地元館長からの聞き取りによる。
- 78) 筒井、前掲「Nature Studyと博物館」。
- 79) 伊藤、前掲『市民の中の博物館』145頁。
- 80) 「博物館の日誌から」N.S.1-1、1955年、8頁。
- 81) 「博物館の日誌から」N.S.1-3&4、1955年、16頁、「博物館の日誌から」N.S.1-6、1955年、8頁。